



昭和五十二年七月七日 発行

定価 一三八〇円

■ 砂 が き ■

著 者 竹 久 夢 二

発 行 人 山 本 一 哉

発 行 所 ノーベル書房株式会社

東京都新宿区西大久保一の四三三 西北ビル

☎二〇〇—〇一六九

☎一六〇

印 刷 所
製 本 所

凸版印刷株式会社



切支丹波天連渡來之圖

リョウ
ター
ン

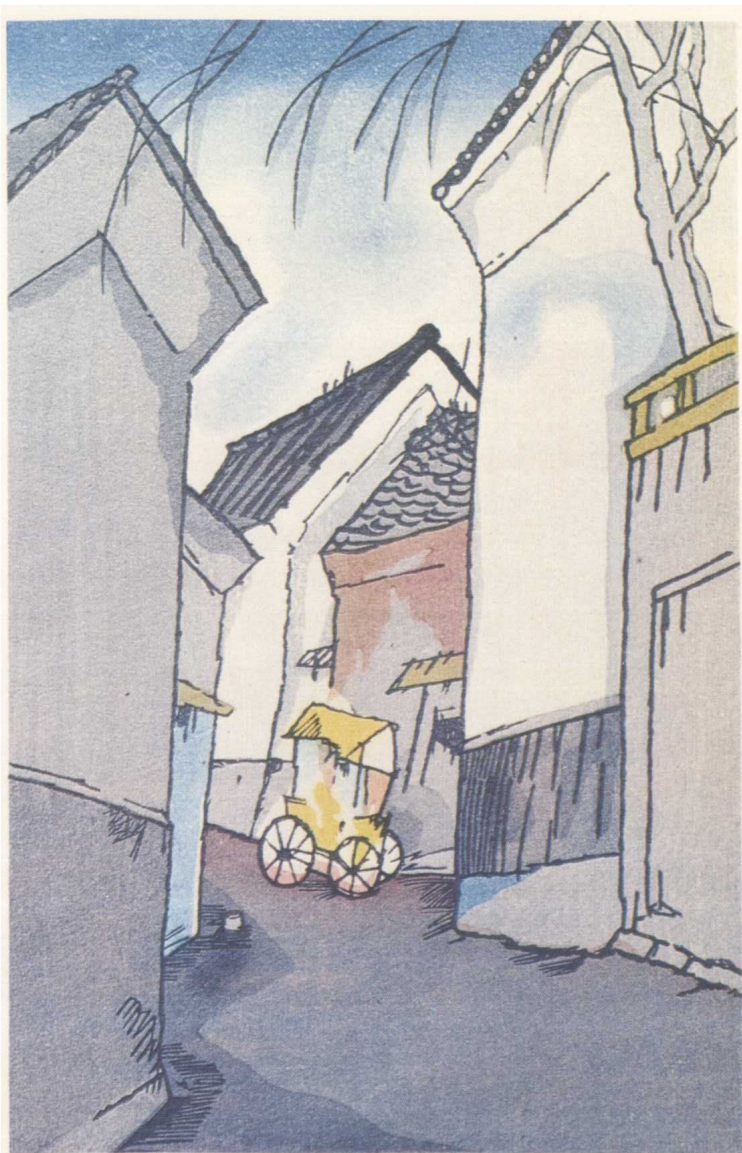
1914



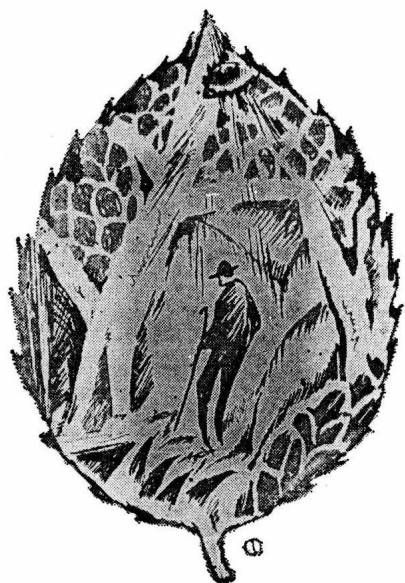
➡切支丹波天連渡來之圖
← 風揚げ（長崎十二景より）

大正3年
大正9年

軸装
水彩







砂がき

砂がき

竹久夢二

ノーベル書房

目次

十字架	一三
心飢ゆ	一四
故郷	一五
つきくさ	一六
ある思ひ出	一八
夕餉時	一九
自畫自贊	二〇
流れの岸の夕暮に	二五
春いくとせ	三〇
カリンの花	三二
ネルのキモノの肌ざはり	三四
兩國夜景	三九
東京地圖	四五

夏の街をゆく心	四七
西京雑信	五九
西京雑信	七五
上方の女と江戸の女	八四
生活小観	九七
私が歩いて來た道	一〇一
青い窓から	一一四
晩春感傷	一三四
春は飛ぶ	一四五
MEMOより	一四九
王春今昔	一五二
ある眼	一五七
市朝雑記	一六三
白晝夢	一七一
竹久夢二略歴	一八一

十 字 架

“神は彼を罰して

一人の女性の手に

わたし給へり”

ああ、

わが負へる

白き十字架。

わが負へる柔き十字架。

人も見よ。

わが負へる美しき十字架。

心 飢 ゆ

ひもじいと言つては人間の恥でせうか。

垣根に添うた 小徑をゆきかへる私は

決して惡漢のたぐひではありません

よその厨くやからもれる味噌汁の匂が戀しいのです。

故郷

いい年をしてホームシックでもありますまい。

だが、泥棒でさへどうかすると故郷を見にゆきます。

生れた故郷が戀しいからではありません

人生があまりに寂しいからです。